

『日本軍兵士』 吉田裕

中公新書／2017年12月／820円(税別)

副題には「アジア・太平洋戦争の現実」とある。この戦争における約310万人(うち軍人・軍属約230万人)にも及ぶ日本人戦没者のうち、実にその約9割が敗色濃厚となった1944年以降のものと推定されているが、著者は多様かつ膨大な史料を縦横無尽に駆使することにより、「凄惨な戦場の現実を歴史学の手法で描き出す。そこから紡ぎ出される戦場の死の実相は、一般的にイメージされる“勇猛果敢な日本軍兵士の戦闘による死(戦死)”とは程遠いものである。むしろ戦死者数を遥かに上回るとされるのが、戦病死・餓死・自殺・海没死・特攻死・日本軍兵士による自国軍兵士の殺害(「処置」と呼ばれた傷病兵の殺害・食料強奪や人肉食のための殺害・軍法会議の手続きを無視した処刑など)などによる死者数であり、著者はこれらの無残な死の歴史的背景が近代日本(軍)の特異性にあることを明らかにする。

『触発する歴史学——鹿野思想史と向きあう』

赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり・戸邊秀明編著
日本経済評論社／2017年8月／3900円(税別)

日本の歴史教科書には女性があまりに少ないと指摘されて以来、徐々には入ってきているが十分ではない。これから科目名が変わるに当たって、この点は改められるだろう。今後、鹿野政直の著作に学ぶところはますます大きくなるはずだ。その著作は幅広く深い。女性史だけでなく沖縄や近代の民衆に関わる記述は魅力的だ。

ただ、高校の教員をしながら著作集を捲っていくのはなかなか難しい。本書は鹿野に関わるベテランから若手の学者たちがそれぞれの視点で鹿野の著作を分担して分析しており、エッセンスを吸収できる。

『友情』 山中伸弥 平尾誠二・恵子

講談社／2017年10月／1300円(税別)

2016年10月に53歳の若さで永眠したラグビー界の伝説的存在であった平尾誠二と、iPS細胞の研究者で2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥は同学年の親友であり、平尾に癌が宣告されてから亡くなるまでの1年間の両者による「共闘」と呼ぶにふさわしい闘病生活が描かれている。『友情』という単刀直入な題名にも納得させられる。

『日本の教師、その12章 困難から希望への途を求めて』 久富善之

新日本出版社／2017年1月／2100円(税別)

私を含め多くの教員は、多忙に追われて世界が狭くなりがちではなかろうか。また、仕事に伴って起こる問題には精神的な側面が大きく、自分で事態を客観化しづらい感じがする。

本書は、まず、大正時代の一教師の殉職事件をとりあげる。その教師に対しては記念碑や顕彰館まであるが、こんなに同じ事態が起きたら責任追及が主になるのではないか。そこに、いまの教員が直面しがちな困難が象徴されていると説く。なぜそうになってしまうのか。どうしていったらいいのか。そうした問いに、日本、欧米や韓国の教員向け調査などを駆使しながら答えようとした良書であると思った。

『技術の街道をゆく』 畑村洋太郎

岩波新書／2018年1月／760円(税別)

たたら製鉄や磁器は日本史の教科書の中に出てくるものの、その画期性を高校生に説明するには材料工学の知識が多少なりとも必要だ。本書は製鉄技術やコンクリートの説明を通して、それが分かる随筆である。

技術そのものには思想性がストレートに現れていないため、表面的には技術が伝承されたとしても、本質が伝わらないことがある。防潮堤がその事例として挙げられる。信玄堤は「水をいなす」思想で作られているとのことだ。「伝わる」という営みや、筆者の勧める思考法を、技術の伝承の問題と並行して紹介している。

『知ってはいけない 隠された日本支配の構造』

矢部宏治

講談社現代新書／2017年8月／840円(税別)

ずっとひっかかっていたことがある。2012年、オスプレイの普天間基地配備をめぐる当時の野田佳彦首相が「[日本側が]どうしろこうしろという話ではない」と発言したことである。

この本を読んで謎が解けた。国民の生命や安全にかかわる重大事態について、政府ではなく別の場所で決めている。それはどこか……。信じられない、信じたくない話が列挙される。しかし、すべて公文書や、当時「密約」だったものを丹念な調査で発掘したものに基づいて書かれているのだ。